

歯 科 健 康 診 査

動 向

平成28年度の歯科健康診査は18団体、受診者総数9,726名に対して実施した。団体数の増減はなかった。

方 法

健診内容は、基本検査項目として歯、歯周組織の検査、その他について実施した。総合評価は「異常なし」「要注意」「要予防処置」「要検査」「要治療」「治療中」「その他」に分類した。

歯の診査に関しては、う蝕の有無、処置（歯科治療）の有無、要治療歯の有無を診査し、歯周疾患の検査はCPI（Community Periodontal Index）を測定した。CPIは検査歯の歯周組織の状態をcode 0：正常、code 1：出血あり、code 2：歯石あり、code 3：4～5 mmの歯周ポケット、code 4：6 mm以上のポケットという重症度（治療必要度）を5段階で判定するものである。また、顎関節症や口腔粘膜疾患などについても診査を行った。

また今年度も啓蒙活動の一環として、口腔清掃状態の評価およびアドバイス（リーフレット配布）に加え、歯ブラシ（キャップ付き）および咀嚼訓練用のチューインガムの配布を行った。さらにブラッシングの状況の評価に加え、咀嚼力検査を実施した。歯磨き（ブラッシング）の状態については「良好」「ほぼ良い」「やや不良」「不良」の4段階で評価を行った。咀嚼力検査に関しては咀嚼力判定ガム（ロッチ製）を用いた。これは咀嚼による色素（赤、黄、青色の3種類）の溶出程度をカラーチャートで評価する方式である。評価は3マニュアルに則って0から5に分類した（5が最も噛めているという評価）。

結 果

受診者の概要は、団体数は増減無く、総受診者数は1,463名の減少であった。受診者の男女比は男性が女性の3.0倍と多く、これは例年と同様であった。

要治療歯については、う蝕、歯周疾患、欠損補綴（ほてつ）など治療を要すると思われたものが31.6%と前年度33.1%に比較して微減していた。治療が必要な歯数では要治療歯1本が15.5%（前年度15.7%）、同2本が6.9%（7.7%）、同3本が4.0%（3.6

%）、同4本が1.9%（2.0%）、同5本以上が3.3%（4.1%）であった。

前年度に微増した重症例が減少に転じていた。受診行動に変容があったことは、本事業の成果と考えられる。

歯周疾患の進行度（治療を必要とする程度）を示すCPIの結果は、歯周組織が健康で受診の必要なし、と考えられたものが31.7%（前年度33.3%、前々年度30.9%）、CPI=1が21.0%（21.9%、19.4%）、CPI=2が45.0%（42.6%、47.7%）、CPI=3が2.1%（2.0%、1.7%）、CPI=4が0.1%（0.1%、0.2%）という結果であった。

対応としてはcode 1にはブラッシング指導、code 2以上は歯科受診が勧められる状態である。CPI code 2までの軽度の状態は治療および予防処置により健全な状態を回復する可能性があり、進行させないことが目標のひとつになる。code 3以上の歯周炎罹患群に対してはかかりつけ歯科への定期的かつ継続的な受診を勧めたい。

ブラッシング（プラークコントロール）の状況については良好が18.2%（前年度25.4%、前々年度21.2%）、ほぼ良い63.0%（57.3%、57.8%）と合わせて8割近い者が良い状況であった。反面、やや不良17.5%（16.3%、19.7%）、不良1.3%（1.0%、1.3%）という結果であった。

咀嚼力に関しては5.34.8%（前年度35.5%）、4.45.9%（44.7%）、3.15.2%（14.9%）、2.1.9%（2.1%）、1.0.1%（0.2%）、0.0%（0%）であった。

「総合評価」としては、「異常なし」が18.9%（前年度18.0%、前々年度17.1%）、「要注意」が18.1%（19.3%、15.1%）、「要予防処置」が28.1%（25.9%、29.2%）、「要検査」が1.1%（1.0%、1.0%）、「要治療」が26.7%（27.8%、30.0%）、「治療中」が7.0%（8.1%、7.7%）という状況であった。

ま と め

重症例の減少、総合評価での健康度改善がH28年度の特徴であった。継続的な口腔健康管理のきっかけになる本事業の重要性が示された。

関係の集計表は120頁に掲載